

ヤスミン・アフマド監督が亡くなる (2009.7.25)

マレーシアの枠を超えたヤスミン作品の魅力

山本博之

(京都大学)

2009年7月25日、国際的に知られたマレーシアの著名な映画監督ヤスミン・アフマド (Yasmin Ahmad, 51歳) が亡くなった。7月23日に打ち合わせ中に脳卒中で倒れ、ダマンサラ・スペシャリスト病院に搬送されて手術を受けていたが、回復することなく25日の午後11時25分(日本時間26日午前0時25分)に入院先の病院で死亡が確認された。

ヤスミン監督はマレーシア国内ではペトロナスのテレビCMでよく知られているが、国外では映画『細い目』(Sepet, 2004年)で広く知られるようになった。『細い目』は『ラブン』(Rabun, 2003年)に続く監督第2作で、その後『グブラ』(Gubra, 2006年)、『ムクシン』(Mukhsin, 2007年)、『ムアラフ-改心』(Muallaf, 2008年)、『タレントタイム』(Talentime, 2009年)を発表してきた。2009年に入り、ヤスミン監督の祖母のルーツがある日本を舞台にした『勿忘草』(Wasurenagusa)の企画が進められていた矢先の悲報だった。

ヤスミン監督は、よりよいマレーシア社会を作り出そうとする人々の強力なサポーターとして、映画制作を通じて文字通り闘っていた人物だった。ヤスミン作品が示す「よりよい社会」は、マレーシアだけにとどまらず、マレーシアの枠を超えて世界に及ぶはずだという期待が持てるものだった。だからヤスミン監督にはこれからまだまだ活躍してもらいたかった。そして何よりも、ヤスミン監督は心を打つ作品をいくつも私たちに与えてくれた。偉大な才能である彼女を失ってしまったのはとても悲しく残念だ。

\*

ヤスミン監督の作品の多くは、民族や宗教の違いを超えた恋愛をドラマの中心に据えている。ただし、それがただの淡く切ない恋愛物語で終わっていないのは、その裏側で、異なる文化・文明をつなぐことと、さまざまな権力関係を逆転させることが試みられているからだ。

異なる文化・文明をつなぐこととは、言葉が違ってても想いを伝えることができるかという問いかけの形で表れ、作品を通じてその可能性が追求されている。『細い目』の冒頭は、中国語に訳

されたタゴールの詩を聞き、それを書いたのが中国人かと思ったらインド人だと知ったジェイソンの母親が発する「不思議ね、文化も言葉も違うのに心の中の想いがちゃんと伝わるなんて」という台詞から始まっている。

この「翻訳可能性」は、詩のように言葉を使うものに限られない。『細い目』や『ムクシン』には、東洋の音楽にあわせて西洋の踊りを踊る場面が何度も登場する。マレーシアの映画にサミュエル・ホイの広東語の歌をかけたことも、異なる文化で作られたものをつなぐことにほかならない。

異なるものをつなぐ試みは、芸術分野だけでなく信仰に関することにも及んでいる。『グブラ』では、異なる宗教の祈りの言葉を交互に見せることで、宗教は異なっても伝えようとする内容は共通していることを示してみせた。このメッセージは『ムアラフ-改心』でさらに強められている。

『細い目』の冒頭のジェイソンの母親の台詞は、『グブラ』のエンディングの「光源は違っても光はどれも同じ」という結びの言葉につながっている。異なる文化・文明をつなげる工夫がされているため、ヤスミン作品はマレーシアの枠を超えて人々に訴える魅力を持っている。マレーシアのことをよく知らない人でも観て十分に楽しむことができ、それなのにそこに確かにマレーシアらしさを感じられるような作品に仕上がっていた。

「翻訳可能性」について、ヤスミン監督はさらに可能性を追求し続けていた。遺作となった『タレントタイム』は、言葉を話さなくても心の想いが伝えられるかという試みでもあった。舞台を日本に移した次回作では、マレーシアという共通の背景を持つ人どうしでなくても心の想いが伝わるかを試みようとしていたのかもしれない。

\*

ヤスミン作品の魅力の 1 つは、既成の権威を引きずりおろし、広く見られる権力関係を逆転させたマレーシア社会を描いたことにある。男と女の間を逆転させ、メイドと主人の間を逆転させた。デートでは男の子が女の子の顔をうかがい、家庭では主人がメイドに敬語を使い、メイドが主人に買い物をもとめている。

『細い目』では、ジェイソンとオーキッドが写真館で 2 人の写真を撮ったとき、男役と女役のポジションを入れ替えている。オーキッドの家では母親のイノムが食事の下ごしらえをしているあいだ、住み込みの家事手伝いのヤムはソファーに座ってテレビを見て大笑いしている。オーキッドの両親もジェイソンの両親も、父親が母親の手から食べものを口に受けている。男が女に「食わせてもらおう」場面は『グブラ』にもあるが、『グブラ』ではさらにスラウ(村の礼拝所)の管

理人が自分で調理して妻や子どもたちに食べさせている。マレーシアの「常識」で認められている父親、夫、教師、宗教指導者たちの権威を次々と奪い、それでいて魅力的な人物たちに描いている。

ヤスミン作品は「マレーシアの現実を生き生きと描いた」と評されたこともあるが、これはおそらく深く考えず「マレーシアは多民族社会だ」という発想から発された誤解だろう。実際には、ヤスミン作品はマレーシア国内外に多くのファンを獲得する一方で、マレーシア国内の批評家たちから「マレーシアの現実に即していない」という批判を受け続けた。「現実に即していない」が芸術作品の評価を低める理由となるマレーシアでは、ヤスミン監督自身も、映画で描かれている内容は実際に自分の身のまわりに起こった「現実」だと言い続けた。

でも、ヤスミン監督は意識的に「現実のないマレーシア」を描いていたのだろうと思う。ただし、「現実のない」といっても、それが永遠に起り得ないという意味ではない。今は現実ではないし、マレーシアの多くの人にとって想像すらしたことがないけれど、それが現実になってもおかしくないと思えるようなマレーシアの姿を美しく描くことで、今とは違うマレーシアが現実のものとしてあり得るというメッセージを強く発している。このことがヤスミン作品の大きな魅力であり、この魅力はマレーシア社会に暮らす人だけに伝わるのではなく、マレーシアという枠を超えて人々に伝わるものになっている。

\*

「細い目」の最後のシーンでは、空港に向かう車内で母親がオーキッドに「もしその人を本当に好きなら、今がそれを伝える最後の機会になるかもしれないのよ」と言って諭している。いつでも言えるからいつかそのうちに言おうと思っているうちに、そのことをヤスミン監督に直接伝える機会は失われてしまった。■